

の欠落を見出すことができた。同書の他の部分に関する原文との対比については不明であるが、「群書：」のなかでこの種の誤りは稀有なことであろうか。

(結語)

安芸家（北小路家）御産所日記にみられる三十回にわたる足利家産事の記録と安芸家当主とのつながりを述べ、更に「群書類従」におさめられた同日記の全文と原文を逐一対比することにより、六ヶ所にわたる異なった記載、日付の誤り、字句の欠落を指摘、報告した。

(北小路外科医院)

日葡辞書から見た安土

桃山時代の医学――

三、身体部位語

亀 節子

大槻 彰・前川久太郎

私達が日常何気なく使っている身体に関する語は、実は、重層的な日本語の構造をそのまま反映したものである。例えば、「歯が痛い」、「口が酸っぱい」、「胃腸の具合が悪い」などといった表現の間に現代人は殆ど差異を見い出さないが、ひとたび、これらの語の起源や伝来を思い馳せてみるならば、「歯」は古く「Pa」と発音され、共通の意味と語根をウラル語の中に探り当てる事が可能であり、「口」は高句麗語の中に「[kəi]（忽次）」という類似語を見い出せるものであり、「胃腸」は五臓六腑説と同じく中国より伝来した語であるといったように、それぞれの言語の成立層が全く異なるものであるという事実を推し測る

ことができる。

身体に関する言語は、同時に身体に関する認識の表明でもあり得る以上、近代の人体解剖が我が国において幕を切って落とされる以前、人々が身体に関して抱いていた認識が如何なるものであったのかを伺い知る手掛りとして、また、幾層にも織り重なった日本語の成立層を解きほぐく一助となるべく、ここでは、一六〇三年、ポルトガル人宣教師の日本語学習のために長崎で出版された『日葡辞書』の約三万の収録語彙の中から、主として身体部位語を紹介する。

拾い上げた身体語並びに身体部位語の三一七語のうち、中国伝来の漢語に起因すると考えられるものが一一五語、それ以外の語では、現代でも共通語として一般に用いられているのが一一五語、死語化、地方語化、隠語化していると考えられるものが八七語であった。

以下、この分類に従って例記する。

一、漢語に由来するもの

I 部位名—ヘア髪毛、ツバネ舌根、サシ指頭等五五語

II 抽象語—ウツ五臟、クハ六腑、シカラ色身等一六語

III 五臟六腑名及びその組み合わせ—ウツ膀胱、クハ中焦、クハ脾腎等二六語

IV 文書語—ウツ玉齒、ウツ玉手、ウツ玉門等七語

V 經穴名—ウツ大椎、ウツ百会、ウツ絶骨、ウツ三里、ウツ帶脈、ウツ命門、ウツ腕骨、ウツきがい、以上八語

VI 脈所—ウツ寸口、ウツ関上、ウツ尺中、以上三語

*「命門—腎臟、またある脈搏」「腕骨—腕の骨」「きがい—日本人が灸をすえる背骨の両側、あるいは尻の或る場所」と三語とも『日葡辞書』の中では經穴名として扱われていないが、それぞれ、督脈上の命門、小腸經の腕骨、任脈上の氣海と解釈し、穴名として分類した。

二、一に分類した以外の語で、現代においても共通語として一般に用いられているもの

① 頭頸部—ウツ頭、ウツ齒茎、ウツ舌等四八語

② 体部—ウツ乳房、ウツ腋、ウツ尻等二五語

③ 四肢部—ウツ小指、ウツ肘、ウツ爪等三五語

④ 全身—ウツ血、ウツ肌、ウツ骨等七語

三、一に分類した以外の語で、死語化、地方語化、隠語

化していると考えられるもの

I 現代語と比較して音の変化だけが見られる語—顎、臍、目頭等—一六語

II 現代語と比較して語そのものの変化が見られる語

- ① 頭頸部—盆の窪、鼻のす、脳等—一八語
- ② 体部—ぼぼ、カイガネ、へのご等—二八語
- ③ 四肢部—あな股、無名の指、小腕等—二十語
- ④ 全身—骨並、肉、肉むら等—五語

これら三一七語のうち、中国医学の影響を受けていない語の多くは体表から触知できる部位に限られており、このことは逆に、体内に関する数少ない語の存在が、当時の人々の体内への関心の所在を示していることになると言い得るわけであり、その特徴は、次の三点にまとめられる。

- 一、臓器としては、「腸」、「肝」（肝・胆）、「肝の束ね」（心臓）、「大便袋」、「尿袋」が識別されているにすぎない。
- 二、個々の関節や骨については、膝蓋骨を意味する「膝の皿」、「つくぶし」、「つぶぶし」以外に、「背骨」、「肋骨」、「腰番」、また、蓄類の下顎骨を意味する「鎌骨」、「三日月」、「三日月骨」などの収録を見るに留まる。

三、分娩時に排出される胎盤の謂である「胞衣」、「後の物」、「いや」の他、「臍の緒」、「子壺」（子宮）などが記載されていて、出産に対するある程度の関心が伺える。

なお、今回の紹介では、「悪血」や「鳥肌」といった病変や生理現象を伴う語はすべて捨象すると共に、「汗」、「涎」、「尿」など排出物を差し示す語も取り上げなかった。

（東京医科大学第二解剖学教室）